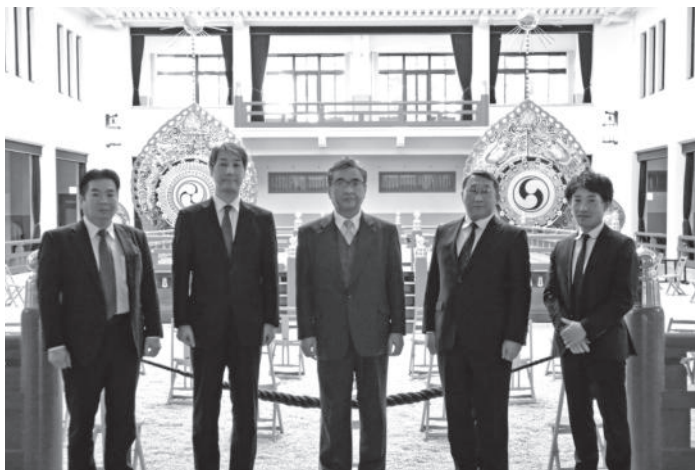


千年の伝統を継承する

～宮内庁式部職楽部の皆さんに聞きました～

宮内庁式部職楽部では、平安時代にほぼ完成した雅楽を保存、継承すべく楽師の皆さんが日々研鑽に努めています。天皇陛下御即位の際や園遊会での雅楽演奏、宮中晩餐における洋楽演奏など特別な職務を担う皆さんからお話を聞きました。

月報編集部



大窪さん 池邊さん 多さん 上さん 豊さん

(敬称略・取材時の役職です)

楽長補 (洋楽器担当)	豊 <small>ぶんの</small> 剛秋 <small>たけあき</small>
楽長補 (和楽器担当)	大窪 <small>おおくぼ</small> 康夫 <small>やすお</small>
楽長補 (教務・楽生担当)	池邊 <small>いけべ</small> 光彦 <small>みつひこ</small>
楽長補 (楽務担当)	上 <small>うえ</small> 研司 <small>けんじ</small>
首席楽長	多 <small>おほの</small> 忠輝 <small>ただあき</small>

インタビューに答えてくださった皆さん

形ですと練習していました。ただ、本番を踏まないことには本当の技術というものは身に付かないので、これは大変なマイナスでした。日頃の研鑽で、それぞれ自分で自分を追い込んで鍛錬していることは常に変わらないのですが、コロナ

「多」 芸事ですから、一度止まってしまうと、どんどんどんどん衰退してしまいます。これはもう本当に練習をきっちりしなければと思いました。ソーシャルディスタンスに対応するためになるべく密にならないように少人数体制で練習したり、寒い中でも窓を開けて、パーティションを作って壁に向かって吹いたり、そんな形でずっと練習していました。

コロナ禍での活動

雅楽は、上代から日本にあった歌舞と五世紀頃に大陸諸国から伝わってきた歌舞が融合してできた芸術です。
宮内庁楽部が演奏する雅楽は、昭和三〇年に国の重要無形文化財に指定され、また楽部楽師は重要無形文化財保持者に認定されました。さらに、平成二一年にはユネスコ無形文化遺産保護条約「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に記載決議がなされたことから、国際的にも認知され、歴史的、芸術的にも世界的価値を有することとなりました。

前までは年に何回か決まった発表の場があり、反応が返ってきていた。しかし、コロナ禍ではそういった外からの評価が全く得られない。これは大変なことでした。

だからこそ、昨年、数年ぶりに演奏会を再開できた時の「戻ってきたな」という感覚はとても嬉しかったですね。やっとここで、できた、と。本当に有難かったですね。

伝統を学び継承していくということ

「多」 宮内庁楽部というのは、音楽学校のシステムになっています。小学校や中学校を卒業した子供たちがここに入って、我々が指導に当たって楽師を育成していく場所でもあるんです。七科目ぐらいいり、それぞれの科目に一人ずつ先生がいて、毎日ずっと一対一で授業を受けています。

昔の先生たちは本当に厳しかった。ただ厳しい分この先生について行けば大丈夫なんだ、怒られても叱られても一生懸命やっていたらそれがいざれ報われるだろうという思いがあつて若い頃はひたすらやるしかありませんでした。ところが、いざ楽師を拝命し、中堅になってくると、誰も怒ってくれる人がいなくなる。本当にこれでいいのだろうかとかどこかで不安になる時があるんです。

例えば、私たちは洋楽も演奏しますが、雅楽と洋楽は目指しているものが異なりますから、雅楽に洋楽の手法を取り込んでしまえばいい過ぎると、本来の雅楽にあった醍醐味といったものが失われてしまうような気がします。綺麗に演奏することだけが本当に雅楽のためだろうか、音程だけを追求するのは雅楽なのだろうか。龍笛なら龍笛、箏なら箏、築が持っている本来の音、音程だけでなく、音色で和していたのではないかと。そういうことを考えてしまふんです。その時代の中での流れを取り込んでいくことも必要だと思いますが、それがこれから先の千年もまた続いていくだろうか、今まで千年続いてきたその理由は一体何だったのだろうかということを考えてると本当に難しいです。

昔は録音機械がなかったから、その時の言葉だけで一生懸命覚えようとしたのですが、今は録音ができるから、もし間違ったり個人的な解釈のみで演奏してしまったりしても、それが残ってしまう。すると後世の人たちが見聞きした時に、それがその時代での正解だと思ってしまう。それが難しいところで、責任重大で、プレッシャーがありますね。

それでも、自分の解釈が正しいものであるという自信を持ちたいので、そのために

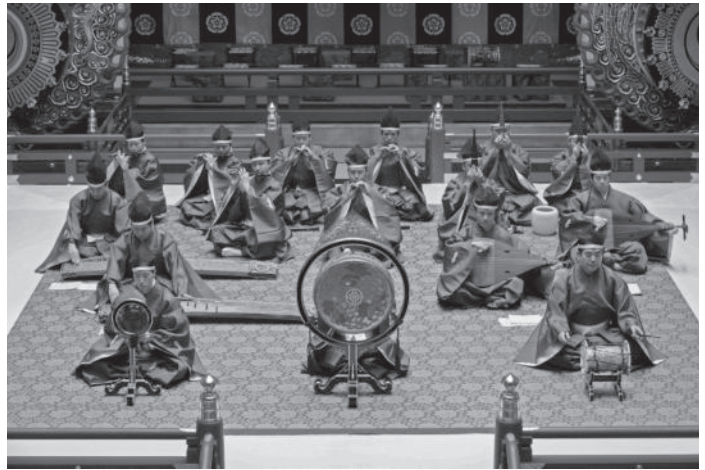
も日夜努力している。様々なことを考え、模索して答えを出す。終わった後に、達成感がある一方、どこかで本当にこれで良かったのだろうかという思いも絶対ついて回るんです。きっとこれは、先達のその時々でトップになった人も皆直面してきた悩みではないかなと思います。

「上」 現存している譜面ですと、様々な解釈ができるような書き方をしている。それを口伝で習うので、それが果たして正しいのか。しかも、かつてはその都度その都度で、それこそ二〇年に一度しかやらないような曲は解釈し直して演奏していたのですが、今は音源として残ってしまうので、それが正しいものとして残ってしまうと、やっぱりちょっと違うのかなという気もします。

「多」 都度都度解釈しながら引き継いできたものが、その後、千年、本当に続くのだろうか。今まで千年以上続いてきたことには何か理由があつたわけですよ。それは一体何だったんだろうとまだ皆模索中です。

担当について

「多」 雅楽の楽器は、吹きもの・弾きもの



管絃（宮内庁式部職提供）

の・打ちものと分かれています。管楽器、絃楽器、打楽器ですね。

この中で、主役は管楽器です。管楽器のうちどれか一つ。絃楽器もどれか一つ。打楽器は全て。その他に舞は右舞と左舞とがあつて、そのうちのどちらか。これを全員がそれぞれ担当します。

誰がどの演目でどの楽器なり舞なりを担当するかということは、その時のバランス

などで僕が決めています。オールマイティにできなければならぬのが大前提ですが、やはり人間ですから得手不得手がありますね。皆がそれぞれオールマイティであることを目指していて、不得手だと思っても一生懸命勉強している。このように、分業制ではないことが、演奏での調和を生み出し、一つの音楽になっているのではないかと思います。

印象に残る演奏

「多」 僕が一番、印象に残っているのは昭和天皇の崩御の時ですね。

新宿御苑で演奏が行われて、その後、武蔵野陵に移って陛下の御霊の行列ができた。僕は当時若手で、先頭で笙しょうを吹いていたのですが、あの日は氷雨が降っていて、新宿御苑は恐ろしいほどの寒さでした。そのため、武蔵野陵では楽部は演奏しなくていいという話が出たのです。楽器が濡れてしまうから。その時に上の人たちが相談してね。我々は何のために今までもずっと陛下に仕えてきたんだ、こういう時のために我々は在るんじゃないかって。それで絶対やらせてくださいと言って演奏しました。あれには鳥肌が立ちました。生まれてこ

の方、天皇は昭和天皇だけしか知らなかったわけですから。その昭和天皇が崩御されたということは、日本人の悲しみであり、安らかに眠っていただきたいという気持ちで演奏にも入っていたと思います。ただ、何しろ若手でしたから、実際のところは目の前のことをやるのに精一杯でしたよね。

後は、海外公演で様々な国に行きましたけれども、やはりヨーロッパで演奏する時のお客さんの反応が印象的でした。拍手には種類があるんですよ。何かこう暖かい拍手であるとか、本当に喜んでくれている拍手であるとか、我々演奏家は拍手で分かるんですよ。

それにヨーロッパは、やっぱり歴史があるからか、僕たちに対して非常にリスペクトしてくれているのが伝わってきましたね。

「池邊」 イタリアだったと思うのですが、ヨーロッパではオペラやバレエ、ミュージカルなどを上演するために若干傾斜がついている傾斜舞台という形のホールがあつて、そういうところで演奏したことがあります。普通に立っていると若干それを感じる程度で、自分でバランスを保てるのですが、面を付けた舞をする、ほとんど視界を遮られるのでバランスを保つのが非常に難しい。

それで大変苦労したという記憶があります。

また、舞台の形が違うために音の響き方などが変わってくることから苦勞もありません。ただその時々で、反響板の使い方など音響の方と相談して、我々ができる範囲で最大の音量で演奏する。最善を尽くすしかないですね。雅楽は、本来は屋外で演奏するものなので、屋外でも音が通るように、みんな全力で演奏しております。そのため、マイクなどの音響機器は使わず、実際の音量だけで演奏するのが基本です。実は楽部の舞台も、室内ではありますが屋外を演出した形にしてあるんですよ。

楽部の舞台について

〔多〕 昭和の初め頃にできた建物なので、歴代の我々の大先生たちの音を全部聞いているわけですよ。そのため、やっぱり馴染んでるんですね。麴倉じゃないけど、菌がたくさんあるんですよ、雅楽の。その菌が我々を後押しして応援をしてくれるような気がしますね。

装束について

〔池邊〕 専門の着付師がいらっしゃるの

で、その方に着付けていただくのですが、一番シンプルな装束は、着付師の方の手を借りずに、すぽっと自分で被るだけというものもあります。片や一番大変な装束は、「太平楽」という舞楽の装束で、一人を着付けるのに三〇〜四〇分、四人がかりで行います。甲冑装束という太平楽専用の装束ですが、袍、指貫袴を着た上に鍔、籠手、脛当、肩喰、帯喰、魚袋などを着け、平和の象徴として逆さまの矢を模した胡籥を背負い、腰に太刀を佩き、重い兜を被り、舞う時には蛇の巻き付いた鉾を持ちます。

話は逸れますが太平楽の舞は、天下太平の世を祈って我が国で構成された最も有名な武の舞で、平安時代から祝賀のうちに舞われ、明治時代以降には即位の際に舞われるのが例となっており、先の令和の御大礼でも宮殿や京都の茶会で演奏されました。

〔大窪〕 太平楽の装束の重さは二〇kg弱。四人で行う舞で、下臈付と言って下の者から装束を着けていくことになっています。

当時、僕は一番下だったので、公演の二時間前から装束を着け始めなければいけないことがありました。一人につき三〇分かかる計算で、合計四人が着けるためです。また、本番の時しか着けられない。練習で着

けることがないので、本番をやってみないと分からないところがあります。

古い装束は昔の人たちの体型に合わせて作られているので、今の人たちの体型には小さいのです。そのため、それを使っていた頃は、今の人を着けると全然サイズが合わなくて肩の上に乗っているだけだったから、逆に楽だった。けれど今は、現代の人の体に合せて大きめに作ったものを使って



太平楽（宮内庁式部職提供）

いるのですが、そうしたら肩にしっかりとまっつてしまつて、肩や手が自由に動かせないし、痣ができてしまつたりしてます。また、演舞が終わつた後はもう汗だくで装束を畳まなければなりません。

「池邊」 全て正絹なので、洗濯は基本できななんです。陰干しして風通しを良くして、乾燥させる。

老朽化したら予算などの計画を立てて新しく作っていくのですが、こういう装束を専門に作ってくれる業者の方は、もはやある程度限られてしまつています。

「多」 伊勢の遷宮では様々なものを全部新調していますが、あれは二〇年に一回というサイクルになっていて、これは職人が技術を継承していくのに最適な周期なんだそうです。それ以上になってしまうと技術が継承されなくなってしまうのです。

我々の装束の中でも、一般にも普及している装束は宮内庁だけでなく神社仏閣でも発注するのですが、特殊な「太平楽」などは宮内庁以外では発注されない。それが一〇〇年に一回になったら職人がいなくなつてしまふ、という問題もあります。

「上」 装束が作れなくなったために絶えてしまつた舞も、昔あつたかもしれませんからね。

「多」 一四六七年に応仁の乱があつたでしょう。あれで京都は一〇年間火の海になりました。我々の祖先は京都にいたのですが、あの辺の楽人はみんな京都の町から日本海を渡つて船で逃げて、東北など様々なところに流れ着いた。そこで雅楽を教えたので、谷地の舞楽とか林家舞楽とか、様々に形を変えて雅楽が残っている。

楽器は、まず箏では舌がなくなつてしまふ。笙も洗い替えをしなければ音が出なくなつてしまふ。龍笛だけが残る。笛は穴が空いているだけだから。それでも樺（編集注…穴の間の盛り上がった黒い部分に巻いて漆で固めている）が取れるなどして変形するから篠笛というもつと安い楽器に変わつてしまふ、篠笛と太鼓だけになる。その太鼓も楽太鼓が壊れて普通の和太鼓に変わつてしまつた。装束は面だけが残る。陵王という演目が残つていて、面は確かに陵王のものだけど、装束は全然別物になつていて。

これがいろいろなところに残つている雅楽の名残ですね。

普及活動について

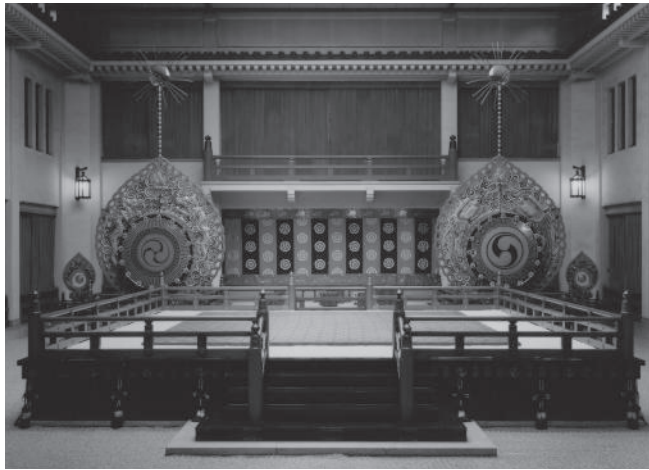
「多」 我々は伝承と普及というものを二枚看板みたいに思つているのですが、この普及活動というものが本当に難しい。

「上」 CDやDVDが出ていますし、テレビ放送されることもあります。ただ、学校の教育としては、ビデオから入るとするのはあると思うのですが、やっぱり演奏会に来てもらうのが一番いいですね。

電波に乗つた音と生の音では明らかに違いますから。音色だったり振動であつたり。息づかいとか息を吹き込むときの音だとか、それは実演でないとなかなか伝わらない。実演でない音だけで聞いてしまつと、笛なんて、吹き込みの音を雑音と取る人もいるわけです。息を入れた瞬間に、すうつという、笛の音とは別に息の音を出しているのですが、音だけを拾つてそれを聞くと、逆にそれが雑音と受け取られることもある。こういうところにも難しさがあると感じています。

「池邊」 演奏会のおきに大太鼓だだいこを打つのですが、例えば太鼓の側に座る方は、舞楽が始まつて、いきなり太鼓がドンツと鳴ると、その太鼓の音に、ビクツて身体が動い

てしまうことがあります。音だけではなく、衝撃波があるためです。音の波というか響きがこう、身体に直接伝わってくるんですよ。そのような感覚をぜひ直に聴いていただきたいと思いますね。



大太鼓 (宮内庁式部職提供)

将来の展望

「大窪」 楽部の伝統、技術が損なわれなようにすることが一番ですね。

個人的なことを言えば、私は父の後を継

いで楽部に入ったので、楽師として一緒に演奏した時期があり、本当に良かったと思っています。父は既に退職していますが、今度は私の息子が楽部に入ったので、いずれ一緒に演奏する時期がくる。それを楽しみにしています。

「豊」 雅楽専門で演奏できるホールはここ楽部にあるものが唯一なのですが、ここだけではなく、雅楽専門のホールが外に一つでもあれば、もっと普及していくと確信しています。実現可能性はさておき、将来的に、限りなくこの雰囲気に近いホールが外にできるといいなと思っています。

「池邊」 私は現在、楽生の教務を担当しています。今、楽部にいる楽生が将来の楽部を担っていくので、その楽生をしっかり指導する。楽部に継承されている楽曲は非常に数が多く、全てを楽生時代に網羅することは元々難しいのですが、ましてやコロナ禍で、楽生の授業時間が削られるようなこともありました。今担当している楽生に、楽部に保管されている明治撰定譜に残されている曲を、極力伝えていきたいと思っています。

また、明治になって日本が西洋の文化を取り入れるようになったときに、楽部が西

洋の音楽も担うことになったという歴史があるため、楽部のオーケストラは日本で一番と言っているほど古い洋楽の歴史を担っています。楽部の洋楽の譜面も非常に貴重なものがたくさん残っているのです、そういうものも大事にしていきたいですね。

「上」 もう現役を退く時期が、すぐ手が届くぐらいまで近づいているので、展望と呼べるか分かりませんが、今まで様々な演奏の機会を与えてもらって、散々やりたいことをやり尽くしてもらったという感覚があるので、そういった感覚を持てるための機会を、もっと後輩たちにも作ってあげたいなと思っています。

「多」 上君と、ほぼ同感ですね。楽生やこれから入ってくる人たちに何か夢を与えられるような、そういう職場であってほしいなと思っています。我々は若い時にそういう先生たちをずっと見てきて、自分たちもいつかこうなるぞという思いでずっとがむしやりに頑張ってきましたので。「宮内庁楽部は永遠に不滅です。」という言葉で締めくくりたいと思います。(笑)

—貴重なお話をありがとうございました。